

創造の源泉へ

フランスの作家・詩人であるポール・ヴァレリー（1871-1945年）が「批評」という表現をしました。日本では小林秀雄（1902-1983年）がその魂を受け継ぎ、日本語による批評を発展させました。彼らはいわゆる芸術家ではありません。ただ、だからこそ、創造の深層のプロセスで起きているアイデアの働きを言語でとらえることができました。アイデアとは、物事の深層にある純粋で完全な何かであると、暫定的にとらえてください。

彼らの批評は、芸術家の作品を入り口に創造の秘密へと入っていき、無意識下で起きていることを意識化・言語化し、言語という共通の土壌で共有することです。受け手は、言語の海を介して受け取ることで心や魂の奥底へと浸透させていきます。批評は作品を言葉で置き換えることではありません。言葉で汚すことでもなく、価値を引きずり落とす事でもありません。同等の質をもった言葉を経由することで、より作品の本質へ至るためのものです。そのためには批評する側の土台に、作者や作品への愛や敬意があることが大前提になります。

創造のプロセスは、無意識と意識との接点で行われます。芸術家には、そうした無意識に関する優れた技術があります。芸術家は創造されたものによってすでに無言で語っていますので、必ずしも言葉で説明する必要はありません。

自分は医療者として、人の心や身体を診て、症状や病を見えています。心や身体という無意識の世界が、症状や病と言う意識の世界に表出されてきたものを診ているとも言えます。表に出てくるまでも何かしらの流れがあり、意味があります。そうした異なる二つの世界に橋をかけることが、医療者の重要な役割とも言えるでしょう。

自分は芸術家ではなく、医療者であり臨床家です。ただ、だからこそ深層にある無意識のプロセスやアイデアの働きを見えています。役割とは相補的なもので、互いに補う合うものです。人は何らかの欠損や盲点や影を抱えているからこそ、異なるものを求め、出会い、創造的な関係性を結ぶことができます。それは人生の地盤となる豊かなものでしょう。

今回の対話では、創造の分野で活躍している方々との対話を通して、創造の秘密や、無意識で起きているアイデアの働き的一端に触れることができると思います。理想と現実のギャップにもがきながらも、何を指針としながら創作を続けているのか。作り手としての良心は何によって支えられているのか。自分では役不足のこともあるかと思いますが、対話が聞き手の心や魂へと働きかけ、お互いがオリジナルで創造的な人生を生きる一助になればと、切に思います。それは芸術のプロセスであり、医療のプロセスでもあるでしょう。そして、生きるプロセスは、そういうすべてを含んでいる全体的なものだと思います。

稲葉俊郎